

目次

○ 研究会発表要旨	
・ Elle avait vingt-cinq ans : 『パルムの僧院』における年齢について (小野 潮) ...	2
・ スタンダールのモーツアルト観をめぐる一考察 (小林 亜美)	... 6
・ 嫉妬という病 『恋愛論』再読の試み (杉本 圭子)	... 7
○Victor Del Litto 氏紹介 (岩本 和子)	... 9
○会員活動報告	... 13
○後書	... 14

【研究発表要旨】

第 45 回 (2006 年 5 月 20 日 於 慶應義塾大学)

Elle avait vingt-cinq ans : 『パルムの僧院』における年齢について

小野 潮

スタンダールが描き出す世界ではしばしば「若さ」に大きな価値が付与されるが、『パルムの僧院』はその点で際立つだけでなく、登場人物の年齢、しかも実年齢だけでなく、その人物がどのような年齢の人間に見えるかという点が小説の主題構成の上で大きな役割を果たしている。

『パルム』にはジーナが実は物語のそれぞれの時点で 25 歳をはるかに越えているのに「彼女は 25 歳だ」「彼女は 25 歳だった」としている文が二箇所にとわたって現れる。一つ目は、スカラ座で彼がジーナがやってくるのをモスカが今か今かと待っていたところ、終に彼女が現れ、その美しさに彼が感嘆する場面で、このとき彼女はピエトラネーラ侯爵未亡人である。二つ目は、ファブリスの無罪を勝ち取るべく大公に謁見する際、正式の礼装ではなく旅装で、しかもまるきり宮廷儀礼にそぐわない時間に単身パルム大公の宮殿に現れるジーナについて語っている。それぞれの時点での彼女の実年齢はそれぞれ 32 歳、35 歳である。

『パルム』では、その年齢について記述される人物、しかも実年齢だけでなく、どのような年齢に見えるかという記述がなされている登場人物が少なくなく、この現象は、主人公、副主人公と言っているファブリス、ジーナ、クレリア、モスカだけでなく、パルム大公や大公妃、大公の愛人バルビ侯爵夫人、大公の従妹イゾタ公女といった人物にまで及んでいる。そして全体的に言えば、若さが好ましいものであり、老いが忌むべきものとされている。これは『パルム』に限った話ではなく、スタンダールの世界は全般的に言ってそのよう性格を持ち、たとえば『ブリュール』の次のような文を思い起こすことができるだろう。「私はあらゆる老いた(vieux)ものを嫌悪していた。というのも私の親族たちは若い人々と私が付き合うのを邪魔していて、彼らはとても老いているように見えていたからだ」。

もちろん、文学の世界で若さがつねにプラスの価値を持ち、老いがすべからく - の価値を付与されているわけではなく、若さが「未熟」「未経験」「傲慢さ」といったマイナスのものとして語られることがあり、老いが逆に「経験」「思慮深さ」「思いやり」といったプラスのものとして語られることもある。『パルム』においてもやはりそうした箇所がないわけではない。しかし、『パルム』の基調が「若さ」を価値あるものとし、「老い」を忌むべきものとしていることは間違いのない。その基調を作品の冒頭に近い部分で決定している重要な登場人物が他ならぬデル・ドンゴ侯爵である。「あらゆる古臭い(vieux)、信心臭い、陰気なものが幅を利かせ、社会を指導するようになった。[...]領地に戻って不平たらたらだったのが、すっかり復讐の念に凝り固まって戻ってきた人々のうちでも、その怒りでデル・ドンゴ侯爵は際立っていた」。

しかし、老人が老人であるだけで価値のない存在となるわけではなく、ファブリスを愛し、彼の未来を正確に予言するブラネス師のような存在がいることも確かである。登場人物の実年齢以上に重要なのは、自分の実際の年齢を乗り越える能力である。上に示したジーナにおけるほど明

瞭ではないが、ファブリス、モスカ伯爵についても同様の傾向を示す例を引くことができる。スタンダールの世界は、プラスの価値を担った人物群とマイナスの価値を負わされた人物群に明瞭に二分される傾向を示すが、ここで取り上げた自分の実年齢を若返る方向で乗り越える人物がプラスの価値を担っていることは言うまでもない。

これに対し、マイナスの価値を担わされた人物群は往々にして老いの刻印を帯びた人物として示される。またその中には自分で望まないのに、実年以上に老け込んでしまっている人物が少なからず見受けられる。代表的例として大公妃と大公の愛人バルビ夫人があげられる。大公妃は実際は 36 歳でしかないのに、大公に愛人がいることに悲しみを覚えながら生きている彼女は 50 歳に見えると記述されている。また実際は 25 歳であるバルビ侯爵夫人は、遠目には若々しくまた美しく見えるものの、空虚な内面しか持たず、金銭のことしか考えないために、顔には細かい皺がより、内面の退屈が顔に現れ、「若年寄 (jeune vieille)」と呼ぶべき存在に成り果てていると記述される。また彼女たちについて *ennui, ennuyeuse* という語が使われていることにも注意をしておきたい。

こうした人物の例としてさらにパルムの大公があげられる。大公は、かつてラッシに唆されて共和派の人間を処刑してしまったことから、暗殺を恐れながら生きており、そのことを考えると実際の年齢より老け込んでしまい、実際は 50 歳ほどでしかないのに 80 歳の老人の顔になると記述される。

以上のように、『パルムの僧院』における登場人物たちは、その実年齢との関連で見るとはっきりふたつのグループに別れ、全般的な傾向として、老人よりも若者が好ましい人物とされ、実年齢を好ましい方向に乗り越えられることができる人物が、プラスの価値を担う人物とされている。また「若さ」がプラスの価値であると同時に、「老年」「あるいは古さ」は往々にして、それ自体忌むべきものとして姿を現し、また「若さ」が前進していくのを妨げる存在として姿を現す。「私たちは愚かな老いぼれ將軍たちに引き止められていたジュノヴァの山中で大いに苦しんだ」。これはロベール中尉がデル・ドンゴ侯爵夫人とジーナに自分たちがしてきた苦勞について語っている文だが、ここでは老將軍たちは「愚か」と形容されている。もちろん彼らは「老いており」しかも「愚か」なのだが、『パルム』の世界においてはむしろ「老いている」がゆえに「愚か」なのだと言えるだろう。そしてその老人たちが「若い」と形容されている軍隊、そして「ロベール中尉」を苦しめていたのに対し、「若さ」を体現するナポレオンが頭になるや否やこの軍隊が持てる力を十全に発揮して奇跡を起こすという構図になっている。そして当然、この軍隊が駆逐したオーストリア勢力の「大公」についてのカリカチュアをものする画家グロは「若い画家 (jeune peintre)」として紹介されることになる。ファブリスはデル・ドンゴのグリアンタの城を「古い(vieux)」ものだとしているがそこでは古さは「圧制」、すなわち「自由を妨げるもの」と同一視されている。また二度目に入獄したファブリスが毒殺されるのを救おうと彼が閉じ込められた部屋へ向かうクレリアを止める看守が「老人」である必然性はまったくないにもかかわらず、その場面でもわざわざ看守は「老人」ということにされる。

しかし、この「老い」と「若さ」の対立は『パルム』の小説世界の人物だけにかかわるものではない。そもそも『パルム』と言う小説は、若さと老年というこのような全体的構図のもとに成り立っていたのだ。『パルム』の有名な冒頭で述べられているのは、イタリアに解放をもたらしたナポレオンの軍隊が非常に若々しい軍隊であったということである。これに対して、イタリアを

抑圧していたスペイン、オーストリア勢力は「老い」の刻印を押されている。これは自由を求める若者と、それを抑圧しに来る年長者という先の『プリュラル』の文と同じ構図である。この点を踏まえた上で、若さと老年、また各登場人物の実年齢と見かけの年齢の問題を考え直してみる必要がある。

モスカはもちろんジーナが実際の年齢よりはるかに若く見えることに魅了されているのだが、彼女の一番の魅力はそこにはない。彼女の魅力はつねに現在に生きていることにある。そしてまたそれ以上に重要なのは、彼女には周囲に集まる人間を若返らせる能力があることだ。「45 歳にもなって、少尉でも顔が赤くなるような馬鹿げたことをするなんて、こんなことがありうるだろうか！」ジーナを見たいばかりに、誰もいない時刻にスカラ座に赴いてしまったときにモスカは思わずこう考えてしまう。ジーナはいい年をした大人に若者のような振舞いをさせてしまう女性なのである。ずっと後、エルネスト四世がジーナに唆されたフェランテ・パラによって殺され、国外に出ていたジーナが自分のもとに戻ってきたときのモスカは、何と 15 歳の少年のような喜び方をすると記述されている。

ジーナのこうした能力は何もジーナに恋するモスカのみにとって有効なわけではない。彼女の義理の姉、デル・ドンゴ侯爵夫人は、グリアンタに戻ってきたジーナに次のように言う。「あなたは私に若いときの美しい日々を返してくれたわ。あなたが到着する前日には私は 100 歳にもなっていたのよ。」

これに対し、パルム大公はジーナとは逆に、モスカに老いることを強いる人物として姿を現す。モスカが思想の穏健さの印として髪粉 (poudre) をつけることを余儀なくされているが、これがなければ彼はもっと見栄えがよかっただろうということが述べられる。ところで髪粉はデル・ドンゴ侯爵、その長男アスカニオ、そして彼ら付きの召使たち、さらには侯爵がジーナのために見つけた結婚相手が付けていたとされるもので、それ自体が旧思想の印、さらに言えば精神的な旧弊さ、「老い」の印にほかならない。またモスカは大公に仕えているがゆえに、大公の老人のような恐怖心をなだめるために自身「老女」(vieille femme) のような振舞いに及ばざるをえなくなっているとされている。

他者を若返らせる能力を持っている人物はジーナだけではない。ファブリスはモスカを若返らせるジーナ自身を若返らせる存在とされている。グリアンタでファブリスとともに過ごす時間を、彼女はまるで子供のようにして過ごす。ファブリスにジーナを若返らせる能力があったことは、彼が彼女の手から失われそうになったときにいっそう劇的な仕方で明らかになる。「伯爵は思った。<彼女は 40 歳だ！昨日はあんなに輝いて、あんなに若々しかったのに！>」ファブリスが逮捕されたことを知り、自分の手からファブリスが奪われようとしていることを知った彼女は、前日まではクレリアと張り合えるほどに若々しかったにもかかわらず一挙に老け込んでしまう。その状態は彼女自身の口からも語られ、彼女は伯爵に自分を 60 歳だと思ってくれとまで言っている。

この他人を若返らせる能力もまたファブリス、ジーナの占有物ではない。ファブリスの若さ、ジーナの若さは、フランス軍の若さ、ナポレオンの若さに重ね合わされていたが、この他人を若返らせる能力についてもまた同様である。若々しいフランス軍の到着とともにミラノを支配した陽気さは、年老いた商人たちや、金貸し、公証人たちにさえ、金儲けや陰気になることを忘れさせる効果をもつのである。

ジーナがモスカを若返らせ、ファブリスがジーナを若返らせるこの物語、そしてファブリスを

失いジーナが年老い、ジーナを失ったモスカがひとり取り残されるこの物語は、ボナパルトに率いられた若きフランス軍によって若さを取り戻したイタリアが、ナポレオンの失脚によってその自分が若返った時代を懐かしみつつ再び老いを生きなければならないという歴史を繰り返している。

このように見てくるとき、『パルムの僧院』の末尾の文はその一見したところのハッピーエンドとは異なった様相をもって迫ってくる。そこでは若きパルム大公の治世が称えられ、モスカ伯爵は君主の信任厚く、非常に金持ちになったと記されている。しかし、ファブリスが亡くなることによって、言わば「若返りの泉」を失ったジーナは年老い、死んでしまう。そしてジーナが亡くなることによってモスカもまた「若返りの泉」を喪失する。そのような状態でパルムがいかに栄えていたとしても、その繁栄は「若さ」「若返り」の契機を失った空しいものでしかありえない。この末尾の文の一見するところパルム繁栄を称えるような文面がまったく空虚なものとしか感じられないのは、ここで述べてきたような「若さ」の契機、しかもその若さこそジーナの *italianité* の精髓であるがゆえに、*italianité* が失われてしまったことを、読者がこの小説を読んで深く感じさせられることに由来すると言えるだろう。

『パルム』を創造することにより、「若さ」を得たのは、あるいは「若返った」のはアンリ・ベイルその人であったと言えるかもしれない。『パルム』を書くことは、スタンダールに、彼が『ブリュラール』末尾で述べた「ミラノ入城」を生き直すのを許す作業であった。彼がこの作品を創造した際、速度から創造される熱に浮かされたような恐るべき仕事ぶりもこの作品が彼に若さを返したことの徴候だろう。『パルム』に対して熱狂的な賛辞を捧げたバルザックにスタンダールは次のように書き送っている。「私はこの 54 ページを書きながら非常に強い喜びを覚えていました。私は自分の大好きなものについて語っていたのです。」そしておそらく『パルム』がスタンダールを若返らせるという以上に重要なことは、この作品、あるいはこの作品に登場するファブリス、サンセヴェリナ、そしてモスカがわれわれ読者を若返らせてくれる存在であるということであろう。

スタンダールのモーツァルト観をめぐる一考察

小林 亜美

スタンダールがチマローザと並んでモーツァルトを熱愛したことは周知の通りである。彼はまた、19世紀初頭のフランスにおいてモーツァルトを「天才」と評価した最初の文化人の一人でもあった。スタンダールが音楽の中でも特にオペラの愛好家であったことは、彼の音楽に対する言及がほぼオペラのみに限られていることを鑑みれば、疑念の余地のないところである。従って今回は、19世紀前半当時のヨーロッパ—特にフランス—におけるモーツァルト・オペラ受容の様相を踏まえつつ、評伝『ハイドン、モーツァルト、メタスタージオ伝』(1815)など音楽にまつわるスタンダールの著書を繙いて、スタンダールのモーツァルト像を浮かび上がらせる試みを行った。

まず、当時のモーツァルト受容について簡単にまとめてみる。18世紀後半にヨーロッパ中を驚嘆させた「神童」モーツァルト人気は、フランス革命後急速に衰え、特にパリでモーツァルトの楽曲が演奏されることは稀となっていた。モーツァルト再評価が徐々に始まったのは、彼の死後10年ほど経ってからのことであり、本国オーストリアやドイツで再評価の動きが高まりゆくとともに、1801年には『魔笛』が、1805年には『ドン・ジョヴァンニ』が改作された上でパリの劇場で上演されて成功をおさめ、それによってモーツァルトの名が再び広く知られるようになった。楽曲の再演の他にも、モーツァルト伝など彼に関する著作も出始めた。なお、フランスではスタール夫人が『ドイツ論』(1810)の中でモーツァルトに触れている。

そうした流れの中で、スタンダールの『ハイドン、モーツァルト、メタスタージオ伝』が登場したのである。この中に「モーツァルトの生涯」と「モーツァルトについての手紙」が含まれているわけであるが、前者はヴィンクラーの『モーツァルト略伝』(1801)の翻案と言えるものであり、純粋にスタンダールの筆によるのは後者の方である。もっとも翻案も既にきわめてスタンダールの著作であることは言を待たない。例えば、当時のパリではモーツァルトのジグシュピール『魔笛』はフランス風のグランド・オペラに改編され、『イシスの神秘』として上演されていた。このような改編は当時の慣例だったのだが、原曲の魅力を損なうそうした上演方法を痛烈に批判した「モーツァルトの生涯」中の一節はスタンダール本人の声に他ならないだろう。この批判は古典派とロマン派をめぐる議論に発展してゆく。誰にも似ていない、ロマン派に属する音楽家、というのが、スタンダールのモーツァルト像の一端なのである。

さらに、スタンダールの偏愛の対象だったチマローザとの関係から、スタンダールにおけるモーツァルトを考察していく。両音楽家を深く愛しつつ、スタンダールが「幸福のチマローザ」、「憂愁のモーツァルト」と、その性格をかなり厳密に区別していたことは明白である。その区別はおのこの作風によるのは無論、スタンダールの個人的体験にも基づいているようだ。ロマン・ロランがいみじくも言っているように、スタンダールにとって「チマローザは青春時代の熱烈な恋人であり、モーツァルトは生涯にわたる情愛深い伴侶であった」のである。

また、チマローザとモーツァルトが小説作品中でどのようにあらわれてきているかについて、さらに詳しく分析していきたい。『赤と黒』第2巻第19章や『パルムの僧院』第26章などにみら

れるように、チマローザとモーツァルトとは、それぞれ独自の性格を与えられつつ、時には奇妙なまでに重なりあい響きあって、スタンダールの作品の中で美しい音楽を奏でているのである。

(補足) 2006年10月28日、舞子(兵庫県)にて、神戸大学国際文化学部岩本和子先生を中心に「モーツァルト・レクチャーコンサート」が開催された。この度の研究発表はこのコンサートに際して発刊された記念論文集『モーツァルトがつなぐ東西ヨーロッパ-パリ~ブリュッセル~ウィーン-』に寄稿した拙論「スタンダールのモーツァルト-19世紀初頭におけるモーツァルト受容の一側面-」に基づいたものである。

嫉妬という病 『恋愛論』再読の試み

杉本 圭子

スタンダールの小説や自伝作品における「嫉妬」のモチーフの重要性は多くの研究者の指摘するところである。『恋愛論』においても「自然らしさ」、「虚栄心」、「羞恥心」などとともにスタンダールの恋愛理論を理解するためのキーワードとされており、その分析に第1巻の3章分があてられている。ただしこの概念と恋愛の四分類、恋愛の七段階、恋愛の形態からみた諸国民といった『恋愛論』の根幹をなす理論部分との関連性は、必ずしも明らかにされてこなかった。本発表では自伝的なアプローチをいったん括弧にくくり、テキストそのものに立ち戻って、論の各所に散在する記述を整理し、「嫉妬」という概念のもつ両義性を明らかにするとともに、スタンダールの恋愛論のはらむ微妙さ、危うさについて考えてみたい。

まず、有名な「恋愛の七段階」との関連においては、嫉妬は「疑惑」を生む一因と考えられる。相手には他にも女性(男性)がいるのではないか、という疑いは、皮肉なことに相手に対する幻覚作用をいっそう亢進させ、もはや後戻りができないほどに恋人を追いこんでしまう。いわば恋を決定的にするこの「第二の結晶作用」の触媒として、嫉妬は積極的な役割を与えられているといえる。

次に、「嫉妬」のモチーフが喜劇的範疇、悲劇的範疇のいずれに属するのかを考えてみる。古来、間男された男(コキユ)が絶好のファルス的題材と見なされてきたことからわかるように、嫉妬する男女の滑稽な姿は多く風刺的的となってきた。スタンダールの後年の作品、たとえば『赤と黒』にも、妻の不貞を知らせる匿名の手紙を受け取ったヴェリエール市長の眠れぬ一夜が皮肉たっぷり書きこまれている。しかし、こうしたゴロワ精神に満ちた挿話は『恋愛論』やイタリア旅行記ではすっかり影をひそめ、逆に嫉妬する男女のひきおこすおぞましい情念劇の数々が描かれる。この理由を考えるために、試みにスタンダールの文学修行時代のノートにまでさかのぼってみると、嫉妬という感情はもっぱら悲劇の題材として見なされていたことがわかる。とりわけその原型ともいえるシェークスピアの『オセロ』に対する関心は高く、部下の術策にはまって一

時の激情で最愛の妻を絞め殺してしまった孤高の将軍の姿は「恋する者におこりうる最大の不幸」であると記されている。『恋愛論』にはダンテ『神曲』の「煉獄篇」にあるピーア・デ・トロメイの挿話など、夫の理不尽な嫉妬によって惨殺された妻たちの物語の数々がもりこまれているが、これらの挿話においては嫉妬するオセローよりも不条理な死をとげるデズデモーナたちに共感が寄せられている。いずれにせよ、こうした血なまぐさい復讐劇は「南の国々でしか見られない」と筆者は述べており、おもに『恋愛論』第二部で展開されることになる国民性と恋愛の形態との相関理論を念頭に、悲劇的モチーフとしての嫉妬劇が選りとられていると考えることができる。

ところで、嫉妬が「第二の結晶作用」の触媒となりうるならば、ミシェル・クルゼの指摘するように、裏をかえせばこれを恋の戦術の一環として利用することが可能である。嫉妬心を利用して相手に熱烈な恋心をおこさせること、これがまさに『赤と黒』においてジュリヤンがコラゾフから伝授される方法であり、その伝統は古くオヴィディウスの『恋の技法』まで遡るが、この戦術は同時に大きな危険性もはらむ。というのは、第三者に言い寄って本命の相手の自尊心を刺激し、自分に夢中にさせるに至ったとして、はたしてそのような愛情が真の愛情といえるかどうか疑問である。逆に、こちらはたいして本気でもないのに、相手のほうが真剣になってしまうという不幸なケースもある。このような場合、嫉妬は恋愛の促進剤となるどころか、真の恋愛、すなわち情熱恋愛を志す者にとってはむしろ阻害剤として作用してしまう。

ルネ・ジラルルの「欲望の三角形」の図式は、まさにこのような他人の欲望の模倣から生じる恋愛を対象としている。スタンダールの情熱恋愛と虚栄恋愛を厳密に区別しており、前者には他人に対する見栄や自尊心がいっさいからまないと述べているが、一方で純粹に「自発的な欲望」（ジラルルの用語）に基づく恋愛というものが存在するのかどうかは疑問である。恋する者は誰しもが無意識のうちに、ライバルたちに対する見栄や嫉妬に突き動かされているのではないだろうか。それとは逆に、虚栄恋愛がときに情熱恋愛に似通った熱狂状態を生むこともある、とスタンダールも認めている。

それでも『恋愛論』全体からみると、情熱恋愛を至高のものとしていっさいの利害関係から切り離そうとするスタンダールの意図は明らかで、ジラルルの主張するように、この時点での彼は他人の欲望という媒介の存在に無自覚な「ロマンティック」の段階にとどまっていた（その対立概念が「ロマネスク」で、ジラルルによれば後年の小説群はすべてこの範疇に入るといえるであろう。ただし「無自覚」というのは言い過ぎで、恋愛の最高の形態とされる情熱恋愛の基盤の危うさに、スタンダール自身もおそらくは気づきかけていたのであり、そのうえで「他人の欲望」の不穏な影から、これを必死で守り抜こうとしていたのである。

【Victor Del Litto 氏紹介】

岩本 和子

* ヴィクトール・デル・リット著（鎌田博夫／岩本和子訳）『スタンダールの生涯』（法政大学出版局、2007年3月）の解説のために下書きした資料です。研究会会員のみなさまはご存知のことばかりでしょうが、著者に関するまとまった情報は意外とないことに今回改めて気づきましたので、この文章を会報上でストックさせていただくことにしました。訂正、追加などご自由をお願いします。

著者ヴィクトール・デル・リットは1911年1月1日にローマで生まれた。軍人を父とする、もともとイタリア人である。しかし22歳の時にファシズムを逃れてフランスへ移住、1934年にはグルノーブルに落ち着く。第二次大戦中は、グルノーブル近郊のヴェルコール高原を拠点とする対独レジスタンスの一員であった。イタリアですでにスタンダールの『ローマ散歩』と出会い、文学学士号を取得していたのだが、解放後は改めてフランスでの学士号を取るべく、グルノーブル大学文学部で勉学を再開する。スタンダールの生地という地の利を最大限に利用し、当時ヴェルダン広場にあった市立図書館に通って資料を漁り、また館長ルイ・ロワイエに手稿を見せてもらったりもしている。1947年にフランスに帰化。勉学の傍らモンペリエ大学で3年間、それからグルノーブル大学でイタリア語講師を務める。1954年にはソルボンヌ大学へ博士論文「スタンダールの知的生活—文学思想におけるフランスと諸外国の源泉(1802～1821年)」(La vie intellectuelle de Stendhal –sources françaises et étrangères de ses idées littéraires (1802-1821))を提出し、学位を取得する。1959年、グルノーブル大学文学部教授となり「比較文学講座」を担当、また同大学にスタンダール研究センター(Centre d'études stendhaliennes)を設立する。1968年には文学部長になり折しも学生運動激化の時期、自身のレジスタンス参加の過去ゆえにか運動にも理解を示し、1970年まで任務を全うした。1980年10月1日付で退官、名誉教授となる。ソルボンヌ大学の教授職も十分可能であったと惜しまれつつ、生涯グルノーブル(そしてスタンダール)を離れることなく、2004年8月9日、93歳で没し、ヴェルコール山中の墓地に埋葬された。

大学での教育、行政に尽くしながら、しかしデル・リットの最も重要な肩書きは「スタンダール研究の第一人者」である。フランスで、いや世界で、その貴重かつ膨大な業績は追隨を許さず、スタンダール研究の発展に多大な貢献をしたのである。作品・作家分析やテキスト編集・出版、未発表資料の発掘などの仕事は、そのタイトルの列挙だけで誇張でなく何十頁にもなるだろう。ごく一部にすぎないが重要なものを挙げておこう。1938～43年には『スタンダール書誌』(Bibliographie Stendhalienne)を出版している。博士論文は1959年に『スタンダールの知的生活—思想の起源と変遷(1802～1821年)』(La vie intellectuelle de Stendhal –genèse et évolution de ses idées (1802-1821), PUF, 730p.)のタイトルで刊行された。スタンダールの青春時代の膨大な読書遍歴を極めて詳細に追った実証的研究である。セルクル・ド・ビブリオフィル版『スタンダール全集』全50巻(Stendhal, Œuvres complètes, Cercle de Bibliophile, 1963-1973)は、スイス人のスタンダール愛好家アラヴァネルとの共同編集になり、この全集のみに収録のテキストも含む重要な版である。プレイヤッド叢書には1963年から1998年にかけて4冊の編集を行った。『書簡集』(Correspondance)『イタリア旅行記』(Voyages en Italie)『自伝的作品』(Œuvres Intimes)『フランス

旅日記』(Voyages en France)である。

また 1958～1995 年の 37 年間、研究誌『スタンダール・クラブ』(Stendhal Club)を主宰し、年 4 回 148 巻をほぼ一人で編集・出版し続けた。この雑誌は 1958 年に没したアンリ・マルチノーの『ディヴァン』(Le Divan)誌を継いだものだが、後者が詩、散文、エッセーなどを含む一般向けの性格もあったのに対し、『スタンダール・クラブ』は質の高いまとまった論文を中心に、未発表原稿紹介にも力を入れた。いささか閉鎖的との見方もあったが、実際には編集者のリベラルで開放的な性格を反映し、多様な研究者、多様な方法論を受入れる国際的な雑誌となった。各国の研究動向特集号はその反映であろう(日本特集も 2 回あり)。この雑誌が母体となって 1960 年頃から「スタンダール国際学会」がフランス各地、外国でも継続的に開催されるようになった。雑誌終刊とともに健康状態も心配されていた最晩年の 1997 年、86 歳でまた新たな挑戦があった。プレイヤード版以降大量に発見された未発表資料を収録する『新書簡全集』(Correspondance générale, Honoré Champion)編集である。1999 年までに全 6 巻(各巻約 800 頁)が刊行された。

生涯をスタンダールに捧げた氏の活動は、執筆・編集以外にも多岐にわたる。例えば 1962 年、パリのモンマルトル墓地の隅でひどい状態にあったスタンダールの墓を、行政や研究者、愛好家の醸金を募って中央近くの明るい木陰に移す功労者となった。グルノーブルでは、スタンダールと街の和解に努め続けた。本書『スタンダールの生涯』を読めばよくわかると思うが、スタンダールは故郷の街と人々を忌み嫌い、それを憚ることなく書き散らした。故郷はまた憎い父の象徴でもあり、17 歳でパリに出てからは、一時的な滞在を除いて、生涯この街に戻ることはない。ヨーロッパを駆け巡り、イタリアで領事となり、パリで客死した。しかしこれも本書を読めばわかることだが、デル・リットはスタンダールの故郷嫌いが決して本心ではないと確信している。グルノーブルやアルプスの山々、自然が作家の心情や資質にしっかりと刻み込まれ、ドフィネ人としてこそ作家「スタンダール」が創られたのだとする。スタンダールにとってのグルノーブル、グルノーブルにとってのスタンダールをあらゆる形で示し、和解の仲介をした。本書もその一手段であろうか、そのために単なる作家伝にとどまらない、著者自身の生の声が強く聞こえる気がするのである。

この解説を書くにあたって気づいたのだが、デル・リットが書いたり関わったりした文献は膨大であるのに、氏について書いたものはほとんどない。スタンダールについては語るが自己は語らない、とも言われた人だ。前述の略歴も、実は逝去時のフランスでの追悼記事(『ル・モンド』『フィガロ』やイゼール県地方新聞など)と『スタンダール・クラブ』の「メモリアル」特別号(No149)にその情報源がほぼ限られている。それほどスタンダールに捧げた、いや一体化した人生だったのかもしれない。付加すれば、氏は音楽も絵画も実践することなく、テレビも持たず、文学だけを愛したらしい。風貌や性格もスタンダールとの共通点が多かったようだ。「小柄で堂々たるお腹、目つきは同じように生き生きと輝き、よく語る口、さかんな身振り手振り」(スタンダール友の会事務局長ジョルジュ・ドゥタン)「強烈な個性、活気溢れる会話」(スタンダール研究者カステクス)などの証言がある。「挑発するということ、これがこの言葉の高度な意味において、スタンダールのエクリチュールの、他の作家とは似ても似つかぬこの作家の全体の行動を写し出

す鏡の、極めて重要な要素です」とデル・リットは言う（『スタンダール研究』[白水社、1986年]の刊行に際して）。デル・リットについてドゥタンはこう語る。「かれの楽しみは、激しい論争で、ベーリストやスタンダリアン、つまり旧・新批評の支持者たち、反抗的な分析家と分別くさい博学家たちを対決させること、美しき獅子ショシャナ（・フェルマン：スタンダール研究者）とか花形研究者たちを、内気な日本人学生や飽くなきポーランド人と同じ土俵に放つことである。」（V. Del Litto, *Essais stendhaliens*, Slatkine, 1981 の解説より）

よく言及されるのが、スタンダールがフランスからイタリアを目指し「ミラノ人」として死んだのに対し、デル・リットはちょうど逆にイタリアからフランスに帰化し、グルノーブルに骨を埋めたという比較だ。このような帰属の危うさもしくは多様性もまた共通点だろう。初期の頃、著書の署名でイタリア式の Vittorio とフランス式の Victor の間で揺れていたのはその一つの表れではないか。1965年出版の本書では Victor だが、1968年刊の『ドフィネにおけるスタンダール』では Vittorio、遡って 1959年の『スタンダールの知的生活』では単に V. だけにしてある。その後落ち着いた Victor Del Litto は『パルムの僧院』の主人公ファブリス・デル・ドンゴと同じパターンの、フランス語・イタリア語折衷名と言える。ちなみに「グルノーブル人、イタリア人、どちらの意識が強いか」との質問に氏は「わたしはスタンダリアンです」と答えている。（イゼール地方紙の追悼記事より）

氏は、恐れと尊敬をこめて「スタンダール研究者たちの法王」（Pape de Stendhaliens）とも呼ばれた。本人も「王」や「皇帝」などより全世界的でいいと認めていたらしい。スタンダール研究を志す全世界の者が必ずその仕事の恩恵を被る。直接氏に会うこと、教えを請うことは一種の特権意識を抱くことでもあった。多くの日本人スタンダリアンも留学、研究、学会などで氏に接し、長期間指導を受けた「愛弟子」もおられる。記者鎌田も直接話を交わした一人である。記者の岩本は残念ながらそのような機会を持ってないままだったが、先日「日本スタンダール研究会」会合の際に若手研究仲間に話を向けるとこぞって氏の印象を話してくれた。「目つきが鋭かった」「声が大きい」「つつこみがすごい（本質的なことを突いてくる）」、また特に遠来の人にとっても親切であること（日本人でご自宅の書斎に通された人もいる）。今思い出したが、氏がスタンダール生誕200周年の1983年に来日された際、まだ学生だった岩本は京大の一教室で『アンリ・ブリュラーの生涯』草稿についての講演を拝聴した。皆、どこかで氏と接触しているものだ。

スタンダール研究の世界で、デル・リットは専制者であったかもしれない。しかしそれを批判する人はいない。氏を継ぐだけのカリスマ的「独裁者」はまだ現れないが、強固になった土台と無数に撒かれた種が今あちこちで育っていることは確かである。『スタンダール・クラブ』終刊後、1997年にパリとグルノーブルで相次いでスタンダール研究誌（いずれも年刊）が創刊された。フィリップ・ベルチエ主宰の *L'Année Stendhal*（2000年以降は出版社が変わり *L'Année stendhalienne* になる）、ミシェル・クルーゼ主宰の *H.B.* である。いずれも質の高い研究論文集で、国際性や方法論の自由を謳い、諸外国（日本を含めて）にも取りまとめをする責任編集員を持つ。執筆者はもちろん、編集委員や外国編集員も二誌にまたがっている。またここ1、2年までにわかにはグルノーブルでのスタンダールが脚光を浴びる出来事が起きている。市立公園に面した旧市役所一階部

分のスタンダール資料館（Musée Stendhal, 1934-2004）、ジャン-ジャック・ルソー街の生家（1966-1999年「レジスタンス資料館」として公開）、グルネット広場に面する祖父ガニオン家（当時の家具も残して2003年まで公開）、いずれもが閉鎖され、グルノーブルにはもはやスタンダールゆかりの場所が皆無になっていた。革命期の中央学校が「リセ・スタンダール」の名で市立女子高校として使われているのを除いては。ところが、研究者やスタンダール協会による市への強い働きかけで、上記3カ所の建物の改修と整備、特に資料館の拡大や関連企画（文学、音楽の集い、シンポジウム、ツアーなど）の充実が一挙に実現されることになった。「グルノーブルのスタンダールゆかりの地再評価」プロジェクトである。資料館は2008年再開予定、また先行活動としてすでに市立図書館でのスタンダール展、関連コンサート、スタンダール歴史散歩・レクチャーなどが実施されつつある。小説作品などのプレイヤード叢書新版刊行開始も忘れてはならない。

もうひとつ付け加えよう。2006年6月、古書大収集家ピエール・ベレスのコレクション競売の公表がスタンダール研究界に衝撃をもたらした。この中にスタンダールの日記手稿5冊（グルノーブル市立図書館蔵に最後まで欠けていた570頁分）と、『パルムの僧院』ルイ・ロワイエ版で、これらの貴重な手稿がそのまま外国コレクターの手に渡ることを恐れ、ジェラルド・ラノーらを中心として研究者が市、県、地方当局やフランス政府に公開書状を送るとともに贖金や全世界からのメール署名を集めた。そして、日記原稿は贖金を足してグルノーブル市が買い取り（80万ユーロ）、『パルムの僧院』（推定40-50万ユーロ）はベレス市がフランス政府に寄付するという最善の結末となった。

かつてデル・リットは、あるグルノーブル市議の「故郷を捨てたスタンダールの名など聞きたくもない」という発言に激怒し、作家に冷淡な街に対してその偉大な遺産を尊重させるよう孤軍奮闘した。今やっと、その街が自分たちの作家を大きく讃え、200年を経た記憶の洗い直しと保存に本腰で取り組もうとしているように見える。デル・リットなくしてはあり得なかった変化である。氏の言葉は、今また新たな重みを持つ。「スタンダールよ永遠なれ」。

【会員活動報告】（2006年4月1日～2007年3月31日）

梶野 吉郎

《*Armance, Métilde et le langage romanesque chez Stendhal*》, *L'Année stendhalienne* numéro 5, 2006

高木 信宏

「『赤と黒』の余白に 『ヴァニナ・ヴァニニ』の成立」、『ステラ』第25号 九州大学フランス語フランス文学研究会、2006年12月

岩本 和子

『スタンダールの生涯』ヴィクトール・デル・リット著、鎌田博夫/岩本和子訳、叢書ユニベルシタス、法政大学出版局、2007年3月10日

杉本 圭子

「嫉妬という病 - スタンダール『恋愛論』再読 - 」、『明学仏文論叢』第40号、2007年3月、p. 1 - 39

栗須 公正

『スタンダール 近代ロマネスクの誕生』、名古屋大学出版会、2007年3月30日

後記

『会報』第17号をお届けします。

活動報告にもありますように、鎌田博夫、岩本和子両氏の翻訳でヴィクトール・デル・リット著『スタンダールの生涯』が出版されました。これで漸くスタンダールの生涯を日本語で概観することができるようになったわけで、この翻訳の意義は大きいと思います。またほぼ時期を同じくして、栗須公正氏の大著『スタンダール 近代ロマネスクの生成』も刊行されました。*Modernité du roman stendhalien* につづいて、栗須氏の長年にわたるスタンダール研究の成果を、このたびはフランス語を解さない一般読者と分かちあいながら読む楽しみは、やはり大きいといわなければなりません。

『会報』第16号が書評や研究ノート、コロックの報告やらを満載していたのに比べて、今回はいささか寂しい感じがします。しかしそれを補うかのように、岩本氏が『スタンダールの生涯』出版に合わせて書いたデル・リット氏紹介の記事を載せることができました。また岩本氏は『周縁の文学』を最近上梓されています。今回の会報は、杉本圭子さんに代わって、後平が担当いたしました。

(後平 記)

